令和２年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立津幡高等学校

重　点　目　標	具　体　的　取　組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）
１　基本的な生活習慣の確立（挨拶の励行、規範意識の確立、清掃の徹底）	①　挨拶運動に取り組み、礼儀正しく、元気で活発な生徒を育成する。	生徒がすすんで挨拶していると思う保護者が Ａ　９５％以上である。 Ｂ　９０％以上である。 Ｃ　８５％以上である。 Ｄ　８５％未満である。	Ｂ １２月の教育活動に関するアンケート （保護者）９２％	今年度は新型コロナ感染防止の観点から、クラス対抗の「あいさつ運動コンテスト」や生徒会役員による「あいさつ運動ウィーク」などが実施できなかった。この影響か年度後半では元気のない生徒もいたので、今後は挨拶への意識向上を図るために集会等を利用していく。
	②　服装容儀の指導を徹底し、生徒の規範意識の向上を図る。	積極的に服装容儀・頭髪やマナーなどの向上に努めた生徒が Ａ　９５％以上である。 Ｂ　８５％以上である。 Ｃ　７５％以上である。 Ｄ　７５％未満である。	Ａ １２月の教育活動に関するアンケート （生徒）９７％	服装容疑・マナーについては、コロナ禍の為、年度当初の大切な時期に集会等の全体指導が実施できなかった。夏休み後に生徒指導課をはじめ、学年や部活動などが連携して指導にあたった結果、生徒の規範意識がもち直してきた。今後も機会をとらえて、服装容儀・マナーの大切さを伝えるとともに、ルールを守る態度をさらに育成したい。
	③　規則正しい家庭生活を送るよう指導することで、遅刻する生徒を減少させる。	遅刻総数が過去５年間の平均と比べて減少率が Ａ　１５％以上である。 Ｂ　１０％以上である。 Ｃ　５％以上である。 Ｄ　５％未満である。	Ｄ １２月時点で過去５年間の平均値より２０％（１４６件）の増加	遅刻の総数は近年減少傾向であったが、本年度は過去５年平均との比較で、２０％の増加（12 月時点）となった。新型コロナ感染防止対策のために、従来の欠席・遅刻指導を控えて「無理して出席させない」指導をせざるを得なかった影響がある。また長欠傾向の生徒の増加、家庭に不安定要素を持った生徒の増加も理由として挙げることができる。不登校傾向や家庭の問題を抱え遅刻・欠席しがちな生徒への対処がこれからの課題である。
	④　清掃の徹底により、学習環境の向上とさわやかで心豊かな学校生活の実現を図る。	環境美化委員による清掃点検（クリーンウィーク）で平均清掃達成率が Ａ　９５％％以上オである。 Ｂ　９０％以上である。 Ｃ　８５％以上である。 Ｄ　８５％未満である。	Ａ １２月の環境美化委員の評価では９６％	クリーンウィークの平均達成率は９５％以上と高水準であった。しかし、講義室の清掃点検をしたところ、清掃が不十分な場所もみられた。引き続き、クリーンウィークや教職員による清掃点検を行うとともに、日ごろから普通教室以外の場所も清掃指導に力を入れていきたい。
	⑤　生徒の良好な人間関係づくりを支援し、不安なく充実した学校生活を送れるようにする。	学校生活に概ね満足している生徒が Ａ　９０％である。 Ｂ　８０％以上である。 Ｃ　７０％以上である。 Ｄ　７０％未満である。	Ｂ １２月の教育活動に関するアンケート （生徒）８１％	コロナ禍のため、生徒の中には学校生活や友達関係に大きな不安を抱える者がいた。スクールカウンセラーや相談担当教員が根気よく面談を行い、不安を解消できるよう支援を続けて来た。今後は、保護者や外部機関等との連携を図り、生徒への支援を一層充実させていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		・校内で何人もの生徒から、すがすがしい挨拶を受けるし、校外においても此方の挨拶を待たずに積極的に挨拶してくる。 ・遅刻者の増加には、不登校傾向の生徒の増加や、コロナ禍の配慮であることが理解できた。専門家の活用や甘えに留意。		
学校関係者評価委員会の評価結果を		・不登校傾向の改善に、外部専門家の協力も得ていく。その中で職員全体の当該生徒の対応のスキル・経験知を育成する。 ・「あいさつ運動コンテスト」等の学校独自の取り組みを通して、総合学科の生徒の啓発に取り組んでいきたい。		

踏まえた今後の改善方策				
重　点　目　標	具　体　的　取　組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）
２　授業の工夫・改善と生徒の進路の実現。（わかる授業の実践及び評価、公開授業への参加、体力の増進、生徒の進路意識の向上）	①　教材・教具や指導方法を工夫して生徒の興味・関心を引き出し、わかりやすい授業を行うよう授業改善に努める。	わかりやすく興味・関心を引き出す工夫が感じられると答える生徒が Ａ　９０％以上である。 Ｂ　８０％以上である Ｃ　７０％以上である。 Ｄ　７０％未満である。	Ａ １２月の生徒による授業評価では９５％	授業を受けて「わかった」と感じる生徒が増加した。授業改善が良い結果となっている。今後も授業の内容や難易度の調整を各教科で検討・実施していく。臨時休業で対面授業ができなかった４月・５月のリモート学習や課題学習の影響は、限定的に留まったと考える。 多くの教員が、互見授業・ICT の活用、研究授業の実施などの、授業力向上によく努めている。授業の充実が進学・就職実績につながると考える。
	②　教員間で授業見学を行い、授業力向上を図る。	各学期に１回以上授業見学を行った教員の割合が Ａ　９０％以上である。 Ｂ　８０％以上である Ｃ　７０％以上である。 Ｄ　７０％未満である。	Ａ １２月の教育活動に関するアンケート （教職員）１００％	前期の８５％から後期１００％となった。前期はコロナ禍の中で互見授業が出来なかった者が、後期は実施した結果であり、授業力向上に努めている一面といえる。 授業力は進学・就職実績や生徒指導にもつながると考えている。
	③　生徒の体力向上に努め、たくましい人間づくりに取り組む。	前年度の自己記録を超えた生徒が Ａ　８０％以上である。 Ｂ　７０％以上である。 Ｃ　６０％以上である。 Ｄ　６０％未満である。	Ａ ６月のスポーツテストの結果では　８６％	昨年度と比較し、学校全体として体力の向上が見られた。体育の授業や部活動の成果と考える。スポーツ健康科学科と総合学科の差や女子の体力低下の傾向にも歯止めがかかった。今後も総合学科の女子生徒への体力アップをすすめていきたい。
	④　一人一人の生徒に対してしっかりとした進路指導を行い、確実な進路希望の実現を図る。	進路内定・決定率が Ａ　１００％である。 Ｂ　９５％以上である。 Ｃ　９０％以上である。 Ｄ　９０％未満である。	Ｂ 就職内定　９６．４％ 進学内定　９６．８％ 全　体　　９６．６％	就職（学校紹介）に関しては、企業の理解と支援をいただき希望者全員が内定を得ている。次年度以降にコロナ禍での景気縮小が予想されるので、今後は例年以上に早めの就活対策を実施していく。 進学に関しては、今年度も国立大学を含む四年制大学に合格者を輩出できた。
学校関係者評価委員会の評価		・授業評価の結果が良好な点は評価できる。日頃の先生方の工夫・努力の成果である。今後は、ある程度疑問が残ったとしても、関心意欲、主体性を育成する授業があってもよいのではないかと思う。 ・進学比率が上昇している中、４年制大学進学者の実数は減少している。近年は個別大学の奨学金制度が充実しているので、その点を広く伝えることで経済的な問題で諦めている生徒の掘り起こしに尽力してもらいたい。 ・どの様な状況下にあっても実社会でやっていけるのは、やる気・熱意・意欲など、物事に主体的に取組む人物である。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		・進路指導面では、どうしてもボリュームゾーンの成績層の生徒の対応に追われがちであるが、上位者層の対応・情報発信にも取り組んでいくことで、４年制大学進学者のバックアップも進めていく。		

重　点　目　標	具　体　的　取　組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）
３　部活動の計画的な実施による効率的・効果的な生徒の技術向上と生徒会活動の活性化（全国大会での上位入賞、ボランティア活動の推進、情報発信）	①　県内トップレベルの競技力を維持し、全国大会に出場できる各種トレーニングを行う。	全国大会に出場した部活動が Ａ　８部以上である。 Ｂ　６部以上である。 Ｃ　５部である。 Ｄ　５部未満である。	―	今年度は全国高校総体などの全国大会が中止のため判定できず。 （女子バスケットボール部、ボート部など一部は、全国大会が実施され出場できた）
	②　部活動を計画的に実施し、科学的な理論に基づき効率的・効果的に生徒の技術向上を図る。	部活動が計画的で充実していると思う生徒が Ａ　９０％以上である。 Ｂ　８０％以上である。 Ｃ　７０％以上である。 Ｄ　６０％未満である。	Ｂ 12 月の教育活動に関するアンケート （生徒）８０％	新型コロナウイルスの影響で予定通りの活動とは、いかなかった。７月調査では、Ｃ評価であったが、練習計画と休養日計画の見直しにより、活動制限のある中で前期よりも、計画的に実行できた成果だと思う。しかし、大会中止により生徒のモチベーションが低下、今後ケアが必要と考えられる。
	③　生徒会執行部の企画力・実行力を育み、活動を充実させるとともに、各種の行事を成功させ、学校生活の充実を図る。	生徒会活動が活発に行われていると思う生徒が Ａ　７５％以上である。 Ｂ　６５％以上である。 Ｃ　５５％以上である。 Ｄ　５５％未満である。	Ｂ １２月の教育活動に関するアンケート （生徒）７４％	コロナ禍の影響で、学校行事が中止になったが反面、生徒会自体が自主的に意見を出したり、主体的な活動を見せたりする場面が見られた。不自由な状況が生徒会活動を活性化させるという皮肉な状況が生まれた。今後も生徒会活動の向上のために取り組みを充実させていきたい。
	④　様々なボランティア活動に参加する生徒を増やし、社会経験を豊かにし、他者と協働する意識を高める。	様々なボランティア活動に参加したと答える生徒の割合が Ａ　６０％以上である。 Ｂ　５０％以上である。 Ｃ　４０％以上である。 Ｄ　４０％未満である。	Ｃ １２月の教育活動に関するアンケート （生徒）４９％	新型コロナウイルスの影響で活動が大幅に制限されている中、生徒個々ができる範囲でボランティア活動に従事してくれた。今後は生徒会執行部の呼びかけ等、様々な機会を企画し、生徒の心の成長につなげていきたい。
	⑤　学校通信（校内、地域）の発行やＨＰ・学校メール配信により部活動や生徒会活動の様子などをきめ細かく発信する。	学校のＨＰや学校メールの発信に満足している保護者の割合が Ａ　８５％以上である。 Ｂ　７５％以上である。 Ｃ　６５％以上である。 Ｄ　６５％未満である。	Ａ １２月の教育活動に関するアンケート （保護者）９３％	今年度は、臨時休業やコロナ対応のため、学校ホームページや学校代表メールでの情報発信が激増した。アンケートに寄せられた意見文やその結果では、「ＨＰ・メールがよく更新・配信されている」、「学校の様子が分かる」という意見・結果が増加している。平時においても多くの保護者に学校を理解していただく情報発信を工夫していく。
学校関係者評価委員会の評価		・幸運にも実施された全国大会での女子バスケットボール部・ボート部の活躍は立派な結果といえる。 ・今年度は学校の臨時休業後においても、コロナ対応の必要性からホームページや学校メールでの情報発信がなされ、保護者も「学校の様子や対応が分かった」と好評価であった。コロナ後においても情報発信・学校理解は極めて大切である。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		・コロナ対応として生徒会活動や学校行事を中止するのではなく、感染防止対応をしながら実施していく方向で進めていく。		

重　点　目　標	具　体　的　取　組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）
４　教職員の時間外勤務の削減による教育活動の充実。（効率的な業務の推進）	①　教職員のワークライフバランスの実現に向けて、校務の効率化に取り組み、時間外勤務の削減を図る。	月８０時間以上の時間外勤務のある職員の延べ人数が Ａ　０人である。 Ｂ（月数×１人）以下である。 Ｃ（月数×２人）以下である。 Ｄ　Ｃを上回る。	Ｄ １２月までの９ケ月で時間外勤務 80 時間を超える延べ人数が ２４人	近年の働き方改革の効果で、業務効率化の意識が浸透した。今年度は年度当初の４・５月は、部活動も中止せざるを得なかったため、時間外勤務の削減がかなり進んだが、部活動再開後は、昨年並みにまで戻ってしまった。改めて、改革における部活動の影響の大きさが実感できた。今後は大きな時間的削減は難しい現状にあるが、部活動指導に関わる時間の効率化を、成果との両立を考えながら調整していく。
		（全教員）タイムマネジメントや業務の効率的な推進を意識した働き方をしていると答えた教職員の割合が Ａ　８０％以上である。 Ｂ　７０％以上である。 Ｃ　６０％以上である。 Ｄ　６０％未満である。	Ａ １２月の教育活動に関するアンケート （教職員）９１％	多くの職員が仕事の効率化を意識している。教職が魅力ある職業として、次世代の若者に認知してもらえるように、現職の者がさらに努力することが必要である。
学校関係者評価委員会の評価		・中間評価での時間外勤務時間の減少は、部活動再開とともに元に戻ったと言わざるを得ない。現実の指導に必要な時間の理解はできるが、何としても効率化をさらに工夫してもらいたい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		・部活動指導の効率化をさらに進める。外部指導員等の活用を図るための環境整備をおこなう。		